

構文学習・指導における基本動詞の重要性
—使役移動構文(caused motion construction)における get を事例として—

ココネ言語教育研究所

佐藤芳明

英語の構文論における議論は盛んに行われているが、英語の構文をどう学ぶ・教えるかという点では際立った主張は提示されていないように思われる。「構文論」と一口にいても、研究の対象を基準にしてみると、そこには以下の3つの立場がある。

i)慣用表現に注目する立場：

e.g. Fillmore(1998)の let alone 構文、Kay and Fillmore(1999)の What's X doing Y 構文など。

ii)動詞がとり得る項に注目する立場（つまり、動詞構文論）：

e.g. Goldberg (1995)

iii)複合表現全般を扱う立場：

e.g. Langacker(2000)

上の分類は、早瀬（2002）による。本稿では、相対的にみて有限の規則性に還元しやすいという意味で、最も教育効果が期待しやすいと想定される ii) について議論を行うことにしたい。つまり、動詞構文に注目する。

動詞の構文が、異なる動詞の数だけ存在するとしたら、構文の学習は単に習慣と記憶の産物ということになり、そこにはパターン認識や抽象化の原理が働く余地がないということになってしまう。しかし、現実はそのようではない。動詞が異なっても構文は同一であるという直観が働くことがある。そのことを実証する例がある。以下のセンテンスの意味を問うた際の母語話者の反応が、それにあたる。

She *mooped* him something.

このセンテンスは、ある心理テストで用いられたものである。語の意味にのみ還元して捉えようとするのであれば、この文は意味をなさない。なぜなら、“moop”は実験調査用のナンセンスワードで辞書にも載っていないからだ。しかし、興味深いことに、被験者である母語話者の60パーセントが、このナンセンスワードを“give”の意味で理解したということである（Goldberg 2013）。このことは、以下の2つのことを示唆している。一つには、「動詞＋名詞＋名詞」という構文自体が、ある種の意味を帯びているということであり、具体的な動詞が他のものにも変わったとしても、その構文が維持されていれば、その構文が有する意味自

体も維持されるということである。今一つは、より具体的に、「動詞＋名詞＋名詞」の構文的な意味に対する母語話者の直観は、give が有する構文的意味に支えられている可能性があるということである。

この点との関連で、構文使用における具体的語彙項目の重要性について、Bybee (2013)は以下のように述べている。

“[R]ather than making reference to a general semantic feature when using a construction, the speaker may very well reference a particular lexical item that has already been used in the construction and stored in memory.” (Bybee 2013 : 58)

構文使用においては、構文自体の抽象的意味特性（たとえそれが記述可能だとしても）よりむしろ、自分がかつて使った経験がある特定の動詞を記憶から参照する傾向があるということである。実証研究においても、この仮説は支持されている。英語母語話者の子供が動詞構文を習得する際、通常、少数の具体的な動詞をめぐって構文形成が生じるとの報告がある（the Verb Island Hypothesis ; Tomasello 1992）。また、ESL 環境でも同種の傾向がみられ、VOL 構文における put、VOO 構文における give のように基本動詞が構文習得において大切な役割を果たしているとの指摘がある（Ellis and Ferreira-Junior 2009）。

これらのことを踏まえれば、動詞構文の指導・学習において、以下の教育的示唆を引き出すことが可能であろう。第一に、構文パターンを共有する動詞群を相互に関連づけて学ぶ構文ネットワーク学習法がある程度の有効性をもつということ。第二に、構文ネットワークの中心に基本動詞を据えることで、その構文自体が学習者にとって学びやすくなる可能性があるということである。

では、動詞構文の観点から注目すべき基本動詞にはどのようなものがあるだろうか。この点について、Goldberg(1995)は Clark(1987)に言及しつつ、go, put, make, do, get の5つを挙げて、それぞれ構文とのつながりについては概要以下のような点に注目している。

go --- the intransitive motion construction

put --- the caused motion construction

make --- the resultative construction

do --- the simple intransitive and/or simple transitive construction

get --- the semantics of yet another construction, that instantiated by verbs such as receive, have, take, etc.

(Goldberg 1995:40-1)

go は「自動詞移動構文」、put は「使役移動構文」、make は「結果構文」、do は「(単純な)自動詞・他動詞構文 (全般)」と関連し、get については、「獲得・所有」の意味合いをもつその他の構文とつながりがあるということである。具体的なフレーズで確認してみると、go there や go to the station などからわかるように、go は自動詞で移動を意味する構文を形成する。Put であれば、put the dishes on the table のように、「何かを動かしてどこかに位置づける」という「設置」の構文を可能とする(構文論の用語では「使役移動構文」と呼ばれる)。Make なら、He made me mad by making fun of me. のように、結果として生じる変化を語る構文をもたらす。Do は、That will do. や I will do it. のように、「自動詞・他動詞構文」の典型となる。Get は、I got a new job. のように、「獲得」を表す構文を生む。

しかし、既に指摘した通り、構文と基本動詞がつながっているというとき、その「構文」というのは、特定の動詞に制限されるものではなく、むしろ、他の動詞群と同一構文を許容するネットワークを形成するものである。そこで、例えば、go であれば「自動詞移動構文」を、walk, run, move, proceed, return 等の動詞と共有することになる(これらの動詞は、実際に、「自動詞 + 副詞 (前置詞句)」という構文パターンを共有している)。Put であれば、「使役移動 (設置) 構文」を、set, lay, plant, bury, install などの動詞と共有することとなる(これらの動詞は、「動詞 + 名詞 (設置対象) + 前置詞句 (設置場所)」という構文パターンを共有している)。このような捉え方は、動詞構文を基本動詞の典型用法と関連づけて捉えられる点においてある程度の教育的効果が期待される。個別に動詞の用法(目的語の有無、前置詞の有無選択等)をマスターすることさえ容易ではないと思われるが、その動詞の用法を構文という観点から他の動詞群と関連づけて学べることの意義は看過しがたいと思われるからである。

しかし、上の Goldberg (1995) の指摘のうち、特に get に関しては、曖昧で不十分な印象を受ける。Get を receive, have, get などの動詞でパラフレーズするのみでは、その意味のポテンシャルを十分に掴むことはできないし、その結果、構文的な可能性も過小評価してしまう憾みがある。Get の用法を詳らかに分析してみると、その構文的多様性が浮き彫りになる。この構文的多様性ゆえに、動詞構文習得において、get を参照することが有効な場合が多いように思われる。本稿の主なねらいも、構文的多様性の観点から注目すべき基本動詞 get を参照することによって、動詞構文のある一定の領域の仕組みについての理解を深めることにある。Get の構文の幅を語の本質的意味(コア)に照らして分析すれば、以下のようなであろう(コア理論については田中(1987, 1990, 2003等)を参照)。

GET の構文可能性--- BE/HAVE/DO の状況を得る (引き起こす)

1. GET + 名詞 I got some money. (「主語 **have** 名詞」の状況を得る)

2. GET+名詞+名詞 Get her some water. (「名詞 **have** 名詞」の状況を得る)
3. GET+形容詞 She got angry. (「主語 **be** 形容詞」の状況を得る)
4. GET+副詞 We got home. (「主語 **be** 副詞」の状況を得る)
5. GET+前置詞句 He got in the room. (「主語 **be** 前置詞句」の状況を得る)
6. GET+doing They got talking. (「主語 **be** doing」の状況を得る)
7. GET+done He got injured. (「主語 **be** done」の状況を得る)
8. GET+名詞+形容詞 Get everything ready. (「名詞 **be** 形容詞」の状況を得る)
9. GET+名詞+副詞 Get him out. (「名詞 **be** 副詞」の状況を得る)
10. GET+名詞+前置詞句 We got the hay onto the truck. (「名詞 **be** 前置詞句」の状況を得る)
11. GET+名詞+doing Get the car moving. (「名詞 **be** doing」の状況を得る)
12. GET+名詞+done Get it done right away. (「名詞 **be** done」の状況を得る)
13. GET+to do They got to know each other. (主語 **do** の状況を得る (引き起こす))
14. GET+名詞+to do I got him to help me out. (名詞 **do** の状況を得る (引き起こす))

上の分析から以下のことが言える。Get は、自動詞 (1, 3-7, 13) と他動詞 (2, 8-12, 14) の双方にわたって、be(3-12)/have(1,2)/do(13,14)の状況を得る (引き起こす) といった意味あいにおいて、構文が展開している。こうしてみると、get の構文には、上の Goldberg(1995) が挙げた5つの動詞のうちの他の4つの動詞とつながる構文も射程に収まっていることがわかる (「自動詞移動構文」(4,5)、「使役移動構文」(9,10)、「結果構文」(8,11,12) など)。

以下では、これらのうち、特に、「使役移動構文」に注目して、get の用法に照らして、その構文を捉え直してみることにはしたい。そうすることで、「使役移動構文」を身につけるにあたって、get の用法を参照することが有効なきっかけとなることを示すためである。だがここで、それに先立って、構文論で論じられる主要な構文パターンについて確認しておきたい。以下、Bencini and Goldberg (2000) と、Goldberg(1995)を引く。

English Argument Structure Constructions (英語命題構造 (動詞) 構文)

Construction	Form	Meaning	Example
Transitive	Subject Verb Object	X acts on Y	Pat opened the door.
Ditransitive	Subject Verb Object1 Object 2	X causes Y to receive Z	Sue gave her a pen.
Resultative	Subject Verb Object Complement	X causes Y to become Z	Kim made him mad.
Caused motion	Subject Verb Object Oblique	X causes Y to move to Z	Joe put the cat on the mat. (Bencini and Goldberg 2000)

Goldberg (1995) による主要な動詞構文：

- the ditransitive (He faxed Bill a letter),

- the caused motion (She pushed the pencil off the table),
- the resultative (He wiped the counter clean),
- the intransitive motion (I sauntered into the room),
- the conative (She kicked at Bill).

(Goldberg 1995:3)

Transitive とは「他動詞構文」、Intransitive motion は「自動詞移動構文」で、特に問題ない。Ditransitive は「二重与格構文」は一般に「二重目的語構文」とも呼ばれ、目的語を二つとる構文と考えられている（正しくは、「名詞 have 名詞」という一つの状況を想定する構文であり、目的語が二つ存在するという捉え方は正鵠を射ているとは言えないが、ここでは詳述はしない）。Resultative は「結果構文」と呼ばれ、「動詞+名詞+形容詞」が典型的な形である。Conative は「動能構文」と呼ばれているが、その意図するところは「間接的接触構文」とでもいうところか。前置詞がなければ直接的な接触・打撃を意味するところ、前置詞を伴うことで意味する「接触」が必ずしも直接的ではなくなるという構文である。

そして、ここで注目したいのが、Caused motion つまり「使役移動構文」である。「使役移動」とは、＜何かに働きかけてそれをどこかに移動させる＞といった意味合いである。上記では、Joe put the cat on the mat. と She pushed the pencil off the table. があげられている。このように、「動詞+名詞+前置詞+名詞」というのが、「使役移動構文」の典型的な語句の並びであり、先に引用した基本動詞5つの中で言えば、put に代表される構文パターンということになる。Put でパラフレーズすることを通じて、その構文の理解を深めることができるであろうことは想像に難くない。が、ここでは、上で確認した get の構文可能性を踏まえて、構文習得を促す重要な基本動詞のひとつとして位置付けるべく、get によるパラフレーズを通じて、「使役移動構文」をひもといてみることにしたい。試みに put と get について、解釈傾向の相違を記すとすれば、おおよそ以下のようなようになるであろう。

Put は、＜何かを動かしてどこかに置く＞がコアであり、VOL (Verb+Object+Location) の構文を形成する。つまり、「設置場所」が必須の情報となる。一方、get は、＜ある状態を得る＞がコアであり、「そうでない状態」から「そうである状態」への変化を表すものである。「使役移動構文」における解釈では、put の場合には、「設置場所」が着地点としてスタティックに意識される傾向があるのに対して、get の場合には、「結果（到達点）」のみならず「変化（経路）」にも意識が向かう傾向があり、その分、比喩的な表現も含めて、より広い文脈で柔軟に応用が利くように思われる。

以下、Goldberg(1995)で紹介されている「使役移動構文」の例を採り上げて、それぞれを get の用法を通じて捉え直してみることにしたい。

使役移動構文の例（１）：

1. They laughed the poor guy out of the room.
2. Frank sneezed the tissue off the table.
3. Mary urged Bill into the house.
4. Sue let the water out of the bathtub.
5. Sam helped him into the car.
6. They sprayed the paint onto the wall.

(Goldberg 1995: 152)

ここで注意したいのは、1 の laugh と 2 の sneeze は、本来、自動詞だということである。だから、They laughed the poor guy. や Frank sneezed the tissue. といった表現は、英語としては成立しないはずである。しかし、その laugh や sneeze が、「動詞＋名詞＋前置詞＋名詞」の語の並びをもつ「使役移動構文」で使われているために、その「構文的意味」によって解釈が可能となっているのである。構文的意味に支えられることによって、動詞自体には、通常の文脈とはやや異なった解釈が与えられる。具体的には、「～することによって（方法）」とか、「～しながら（付帯状況）」といった具合に解釈の調整が行われたりする（これらの解釈の仕方は、広義に「様態」的解釈とみなすこともできる）。試みに、上の例を、get を使ってパラフレーズを試みると、以下のようなになる（括弧内には元の「使役移動構文」で使用されている動詞を原形で記してある）。

- 1'. They got the poor guy out of the room. (laugh)
- 2'. Frank got the tissue off the table. (sneeze)
- 3'. Mary got Bill into the house. (urge)
- 4'. Sue got the water out of the bathtub. (let)
- 5'. Sam got him into the car. (help)
- 6'. They got the paint onto the wall. (spray)

上記の 1'～6' は、「get＋名詞＋前置詞句」の構文に換言されたものだが、これらの例では、「何かを動かしてある方向へ向かわせる（→その状況を得る）」といった意味合いを感じ取ることができる。つまり、ある種の「使役移動性」の意味成分が維持されていることを確認できる。しかし、すべてを get で捉えてしまえば、その細かなニュアンスを感じ取ることができない。そこで、それぞれ具体的にどのようにその移動が行われたのかを示すのが、括弧内に記された動詞だということになる。この種の解釈の方法を、「get＋名詞＋前置詞句＋by doing」あるいは「get＋名詞＋前置詞句＋(while) doing」のように、公式化することもできなくはない。が、この種の換言作業で原文のニュアンスをあまりとろなく汲み取れる

とは限らない以上、個々の文脈で微調整を伴う解釈が求められるのは言うまでもない。しかしそれでも、この構文の構造的な理解を確保するにあたっては、get を用いたパラフレーズが有効であることは確かなことのように思われる。

以下、続けて、「使役移動構文」の例をみてみよう。

使役移動構文の例（2）：

7. Sam helped him into the car.
8. Same assisted her out of the room.
9. Sam guided him through the terrain.
10. Sam showed him into the living room.
11. Sam walked him to the car.

(Goldberg 1995: 162)

これらの例も、get を用いたパラフレーズが基本的に有効であるように思われる。11 は、Sam got him to the car by walking ではピンとこないかもしれないが、例えば walking together などとすれば、理解しやすくなるかもしれない（この種の微調整は文脈に応じてなされるべきであって、機械的な書き換えで対処するという発想は控えた方がよいと思われる）。またそもそも、11 の walk は通常は自動詞だが、この構文では他動詞化している（もちろん、I'll walk you. で意味が通ずる場合もある。が、それは I'll walk you to the station (there). などといった、移動の経路や方向が前提として意識されている。文脈的に自明であるために言葉の表面には現れていないが。つまり、「他者に働きかけて移動をさせる」といった意味合いをもつ（使役移動）構文の中で、walk が役割を果たしているということを意味している）。

これは、構文の力に影響を受けて動詞の用法に揺らぎが生じている例と捉えることができる。その点、11 の walk のみならず、上でみた 1 の laugh、2 の sneeze も同様である。これらの現象から一般化を試みるとすれば、通常は自動詞として使われる動詞であっても、「使役移動構文」のもつ構文的な意味から解釈が成立する場合には、その自動詞がこの構文（動詞としては他動詞用法）で受容されるということを意味している（しかし、その構文を離れて一般に他動詞として使われ得るということを意味するわけではない；その意味で、「自動詞・他動詞」の識別なども「構文」との関連性を踏まえる必要があるということになると思われる）。

もう少し、「使役移動構文」の例をみてみよう。

使役移動構文の例（3）：

12. Chris pushed the piano up the stairs.
13. The wind blew the ship off course.
14. The rain swept the ring into the gutter.

(Goldberg 1995: 165)

これらも get によるパラフレーズで、凡その解釈が可能となるように思われる。ここで使われている動詞 (pushed, blew, swept) はいずれもダイナミックな動作性を帯びているので、get を使ったパラフレーズを行ったとしても、その様子 (様態) を視覚的にイメージしやすい感じがする。

以下、心理的な動詞を使った例にも注目しておきたい。

使役移動構文の例 (4) :

15. Sam frightened Bob out of the house.
16. Sam coaxed him into the room.
17. Sam lured him into the room.

(Goldberg 1995: 166)

ここでの動詞 (frightened, coaxed, lured) は、心理的な意味合いが強く、物理 (動作) 的な影響が希薄である。が、それでも、get を使ったパラフレーズを通じて、心理的にある種の影響を与えて、移動を引き起こしたという具合に解釈することが可能である。

以下、「使役移動構文」の最後の例として、調理行為の表現についてみておきたい。

使役移動構文の例 (5) :

18. The butcher sliced the salami onto the wax paper.
19. Joey clumped his potatoes into the middle of his plate.
20. Sam shredded the papers into the garbage pail.

これらの例からわかるように、ある食材に対して、変形を加えつつ、それをどこかに移動させるという表現を行う際に、「使役移動構文」を使うことができる。調理動詞の意味成分に「変形 (変化)」の意味合いが含まれているために、「移動」のみならず「変形」が合成される点が、他の「使役移動構文」一般との相違である。

本稿では、基本動詞 get の構文的可能性に注目して、そこから「使役移動構文」を捉えることの有効性についての検証を試みた。扱った例文は、構文論で議論されるような、やや一般

的ではないものであったが、それらにおいても get によるパラフレーズによって、「使役移動構文」の構文的意味を感得することがより容易になることが確認できた。今回は、production への関心はさて置き、comprehension に傾斜した議論を行った。具体的な指導や学習の仕方などは明示的に示していないものの、get を使ったパラフレーズによる解釈訓練は、動詞構文を基本動詞の用法を参照しつつ、同一の構文を受容する他の動詞群を相互に関連づけながらネットワーク的に獲得していくプロセスの足掛かりとなるのではないかと思われる。

主要参考文献

- Bencini, G. M., & Goldberg, A. E. (2000). The Contribution of Argument Structure Constructions to Sentence Meaning. *Journal of Memory and Language*, 43(4), 640-651. doi:10.1006/jmla.2000.2757
- Ellis, N. C., & Ferreira-Junior, F. (2009). Constructions and their acquisition: Islands and the distinctiveness of their occupancy. *Annual Review of Cognitive Linguistics Published under the Auspices of the Spanish Cognitive Linguistics Association ARCL Annual Review of Cognitive Linguistics*, 7, 188-221. doi:10.1075/arcl.7.08ell.
- Goldberg, A. E. (1995). *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. (2013). Construction approaches. In T. Hoffman and G. Trousdale eds., *The Oxford handbook of construction grammar*, 15-31. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Tomasello, M. (1992). *First verbs: A case study of early grammatical development*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 田中茂範編 (1987) 『基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ』 三友社.
- 田中茂範 (1990) 『認知意味論：英語動詞の多義の構造』 三友社.
- 田中茂範・武田修一・川出才紀編 (2003) 『E ゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション.
- 早瀬尚子 (2002) 「構文解析の中核としての動詞－構文理論から見た動詞－」『言語』Vol. 31. No. 12.